

## 名句が滑稽句に変身 ①

小林英昭

無謀でしかも恐れ多い所業ではあるが、言葉遊びとして気軽に読んでいただきたい。まずは軽いジャブとして一句。季語が三つもある三段切れで有名な句。名句というより古典句と言うべきかもしれない。

名句 目には青葉山ほととぎす初鱈 素堂  
目には紅葉野にきりぎりす初秋刀魚

この句は一読、滑稽句とは思われないがパロディではある。パロディを辞書で調べると、「文学作品の一形式。よく知られた文学作品の文体や韻律を模し、内容を変えて滑稽化・風刺化した文学」とある。滑稽句に変身させるには、まずパロディからである。

名句 山又山山桜又山桜 阿波野青畝  
海又海海月又海月

海に海月の大量発生である。山の一字を海に替えることにより、海月をテーマにした滑稽句になった。

名句 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規  
牡蠣くへば腹が鳴るなり下痢嘔吐

健啖家の子規は当然、牡蠣も好きだったはず。ただ新鮮さを欠く牡蠣には要注意。あたと強烈な下痢嘔吐が待っている。子規も経験したかもしれない。

名句 夏草や兵共がゆめの跡 芭蕉  
夏臭や兵共が靴の中

説明の必要はないだろうが、とにかく臭い。運動靴は特に臭い。まして毎日脱いでいるかいないか分からない最前線の軍靴の中は、推して知るべしだろう。次は、江戸時代に舞台を借りた二句。

名句 傘さゝぬ人のゆきゝや春の雨 永井荷風  
傘さゝぬ半平太にも春の雨

名句 遠山に灯の当たりたる枯野かな 高浜虚子  
遠山の背に当たりたる花吹雪

一句目は、ご存知、幕末の志士武市半平太（瑞山）の名台詞。二句目は、これもご存知、江戸後期の町奉行遠山景元、遠山の金さんである。テレビでよく聞いた「この桜吹雪が目に入らぬか」の名台詞。

名句 礼拝に落葉踏む音遅れて着く 津田清子  
礼拝と落穂ひろひはミレーの絵

印象派は日本人好みの絵と言われる。礼拝は有名な「晩鐘」の絵のこと。もう一つは、これも有名な落穂拾いの絵のことである。

名句 蒲団着て寝たる姿や東山 嵐雪

蒲団着てねたるふりする寝小便

みんな経験があるかな。あの何とも言えぬ嫌な感じは経験したものでしか分らない。なんとなく罪の意識もあって蒲団からなかなか出られないのである。どうせすぐにばれてしまうのに、無駄な抵抗と言ったところである。

名句 あるときは船より高き卯波かな 鈴木真砂女

近ごろは鯛より高き秋刀魚かな

不漁で秋刀魚の高いのに驚く。地球温暖化で海の様子が変わったのだろうか。トランプ大統領は温暖化防止に消極的である。スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリさんの声が届かない。

名句 座る余地まだ涅槃図の中にあり 平畑静塔

猫描く余地涅槃図の隅にまだ

猫と涅槃図ものの句は捨てるほどある。滑稽句には欠かせないテーマでもある。

名句 滝の上に水現れて落ちにけり 後藤夜半

滝の上に水顔出してから落ちる

名句をさらに細かく描写してみた。